「好きな景観」写真展にみる景観読解過程と景観タイプ DECIPHERING PROCESS AND CLASSIFICATION OF VIEWS IN THE PHOTO EXHIBITION "MY FAVORITE VIEW IN KYOTO"

平尾和洋*, 宮嶋 聡**, 川崎 清***

Kazuhiro HIRAO, Satoshi MIYAJIMA and Kiyoshi KAWASAKI

113 photo samples, explanation of each by photographer, and the voting result in the exhibition "My favorite view in Kyoto" were analysed by KJ method of grouping, quantification 3, and Ward method of clustering. In the grouping of paragraphs of explanation, structure of recognition and evaluation of a view consist of 5 aspects; 1)spatial view objects 2)changing objects in time and objects of quality 3)experience 4)knowledge 5)an image. 7 views-types and 5 composition-types were classified. As a result, the traits of 17 favorite views were recorded according to composition-type, view-point, constituent elements, elevation and depression of an view-angle.

Keywords : attractive element, constituent element, view-type, composition-type

意識要素, 構図要素, 景観タイプ, 構図タイプ

1. はじめに 本研究の目的と構成

本報は、対象を京都の固有景観に求め、「共通して好まれる景観の基本型」の類型化を通して、景観現象の構造把握に有意な尺度の定着を目的とするものである。樋口は「人間が棲息する環境である限りそこには共通した好ましい景観の型がある」として、文化の集団表象としての景観に潜む共通性を指摘した¹⁾。また中村は、ユートピアに通底する風景イメージに関する共通性を指摘している²⁾。本論では同様の視点にたつて、多様な現代都市景観の中から一般市民により選択された「好ましい景観」を扱い、類型化により共通性の体系化を試みる。景観型の整理を通して、心地良さの理由を問い、景観創生のための基礎資料を提供することを意図するものである。樋口によれば、心の中で人間が求める風景には①人間が本能的に求める風景②記憶・郷愁の風景の2つがあるとされる。ここに示される様に、分類された景観型が、深層心理学的原型であるのか³⁾、若しくは個々人の印象体験に属す

る原型にあたるのか⁴⁾といった議論は、一連の研究の後、総括の際に考察を加えることとしたい。

景観とは視覚認知できる形や色彩の見え方の問題だけでなく、視覚を媒体にして人が情緒的・文化的意味を解読した結果、形成されたイメージである⁵⁾。こうした立場に立ち、拙稿では観察者の景観読解・心象形成のプロセスについて考察を加えた上で、従来の視覚情報の客観的把握のみならず、「観察者がイメージ形成過程に於て特に注目・意識した景観要素(以下「意識要素」と略す)」に着目し、景観型の類型化を行う。具体的には京都市内で一般市民公募された「私の好きな京の景観」写真展を題材に、①景観観察者の言語情報②観察者の意識要素③視覚情報の構図要素の3つの視点から分析を試みる。先ず観察者による写真解説文を観察者の景観意識の現われた言語情報と捉え、KJ法によりグルーピングし、読解・評価過程を検証することが第一作業となる(意識分析)。続いて分析結果から意識要素を導きサンプルのデータ記述を行い、数量

* 京都大学工学部建築学科 助手・工修
** 京都大学工学部建築学科 大学院生
*** 京都大学工学部建築学科 教授・工博

Reserch Assoc., Dept. of Architecture, Kyoto Univ., M. Eng.
Graduate Student, Dept. of Architecture, Kyoto Univ.
Prof., Dept. of Architecture, Kyoto Univ., Dr. Eng.

化類型を行う。更に近～遠景構成要素・仰俯瞰等の特性項目による構図類型を行い、如上2類型のクロス集計に基づいて「景観型」を総括する。行動景観(動的な風景の演出)を配慮する必要性に対し止景観(静的な風景の演出)からの分析が主となるが、環境を日常的に注意深く観察し、ある枠内にそれらを切り取った撮影者の眼による絵画的景観は、景観美に対する集約化が施されていることが予想され、構造分析に利点を持つと判断した。

景観類型に関する既往論文については、距離景概念から超近景～遠景要素を導入した荻島他^{6)・7)}の研究、水墨画を対象とした須藤⁸⁾、評価言語から陰影景を類型化した川崎⁹⁾、夜景鑑賞を言語情報と構成要素で扱った小柳¹⁰⁾、構図尺度・質的尺度を整理した羽生¹¹⁾他の研究がある。本研究は如上の前例に範を採りながら、一般市民に景観選択を求め、現代都市景観を言語情報と写真によって類型化するものであり、本報の独自性もここにあると考える。

2. 分析の対象

具体的な分析の対象は、「私の好きな京の景観」応募写真展※注1)に寄せられた写真113点、年齢・性別等の撮影者データ(全て京都市民)、撮影者の応募作品中の景観(写真)に対する解説文、及び公開展覧会に於ける来訪者の投票結果(3495票)である。

応募写真の撮影地を頻度順に図1に示した。上位5地点のうち第1・3位は、京都の主要観光地ランキング※注2)に準ずる一方、他3地点(鴨川沿岸・嵯峨野鳥居本・南禅寺)は京都市民に馴染まれた日常的視点場である。

3. 観察者(撮影者)の意識分析

各撮影者は写真に加え、「好きな景観」に関する解説文を添えている。これらの記述を句読点毎に細分化し(以下細分化された各記述を「記述サンプル」と称す)※注3)、KJ法¹²⁾により整理した結果を図2に示す。総記述サンプル数は256ヶである。各々はグループ編成過程で小グループから大グループへと集約されて行くが、階層化されたグループを小さいものから第1グループ・第2グループ(以下「第1G・第2G」と略す)の順に呼称した。最終的に【空間的視対象】【時間的・質的視対象】【知識】【経験】【心象】の5つの大グループ(以下「大G」と略す)により整理された。これらは第3G若しくは第4Gに相当する。

(1) 空間的視対象

【空間的視対象】(69サンプル)は、[道][塔][里と自然][街並み・地区][山・山並み][河川][特定の場所](以上第2G)[交通][人](以上第1G)の9つから成る。[道]には「八坂の塔の見える石畳の道(83-3)※注4)」[石畳の道と伝統的な町家(94-1)]等、[石畳の道]を特化して評価する傾向が見られる。[塔]は「東寺の塔と一条の光(22-2)」等の、

図1 写真撮影の視点場

塔と「他の何か」を組み合わせるものと、「ライトアップされ闇に浮かぶ三重の塔(96-2)」等の「塔の夜景」を指摘するものがある。[里と自然]は郊外の民家や水田・杉林等を指摘するものである。[街並み・地区]は「昔ながらの雰囲気を残す町並み(78-1)」等の「昔ながらの街並み」の指摘と、「陶器屋の醸し出す独特の雰囲気(68-2)」等の「町筋の雰囲気」・出格子の並ぶ様子などを賞賛する記述が多い。[山・山並み]の記述は全て比叡山・北山・東山を視対象とする。[河川]は「白川の流れと花と橋(81-3)」等の「川とその周辺の風景」を愛でるものと、「昔を偲ぶ舟運風景(25-1)」等の、川と[水運]船の組み合わせが取り上げられる。山と河川を同時に景観対象と捉える例も4つ見られた。[特定の場所]では御所が多く挙げられたが、「御所が故郷の中心地(8-1)」[限らない安らぎを持つ空間である御所(5-2)]等に見られる様に、ある広がりを持った領域を指摘するものが多く、特定建築物のみを取り上げるものは2例に留まる。

(2) 時間的・質的視対象

【時間的・質的視対象】(73サンプル)については、[季節的要因](第3G)[時間的要因][色彩][形](第2G)[光と影][眺望][素材](第1G)の7グループに分けられた。[季節的要因]は更に「ユリカモメ」と「雪」に代表される[冬]、[鴨川の水のぬかるみ]と「桜」に代表される[春]、[銀

【時間的・質的視対象】

【空間的視対象】

図2 観察者の意識のグルーピング (数字は[写真サンプル番号-記述サンプル番号])

杏の木]と[紅葉]に代表される[秋]、[四季折々の変化]の4グループで構成される。[時間的要因]では「黎明の東山(9-3)」「朝方の風景(112-3)」の様に[夜明け]の景の記述が多く見られた。[色彩]は「紅白の彼岸花(19-3)」等の[花の色]、「真っ青な空(6-1)」等の[青い空]、「朱塗りの冴える愛宕神社(113-1)」等の[朱塗り]の3つの指摘があるが、花の持つ色彩は特記されていない。[形]はシルエットの美しさを指摘するものが多く、[素材]は「石垣と堀(30-1)」「漆喰塗りの純白の土塀(33-3)」の様に石垣・土塀に注目するものである。

(3) 観察者の知識

【知識】(30サンプル)は、[歴史的知識][有名度](第2

G)[親しまれている場所][境界の拠点][名前](第1G)の5グループに分けられた。[歴史的知識]は、「上賀茂神社の神官が住んでいた社家町(18-3)」「維新の志士が利用した船宿(31-1)」等の[史実]一般に関する記述と、「幕末の史跡として戦災を逃れた一力(86-2)」等の[戦禍に耐えてきた]点に関する記述がある。[有名度]は「コマーシャルやテレビによく出る(69-2)」等の[映像]、「最も知られる名所清水寺(96-1)」等の[知名度]、「世界に誇れる建造物である金閣寺(13-2)」等の[世界的建造物]の評価に関する記述がある。[名前]は知名の由来に関する知識、[境界の拠点]は地区の代表的な地点・建物、[親しまれている場所]は市民の利用頻度の高さをそれぞれ指摘するものである。

(4) 経験

【経験】(16サンプル)は「50年前小学校の頃毎日見た街並み(20-2)」「子供の頃の迷信の思い出(68-1)」等の[過去の体験]に関する記述と、「サイクリング車で偶然見つけた風景(11)」「四季を通してよく行く(39-1)」等の[日常的な接触]に関する記述に分けられる。

(5) 観察者の心象

【心象】(68サンプル)については、観察者による[意味の読みとり](第3G)[情緒の表現](第2G)に大分される。[情緒の表現]は「奥行き深い感じ(75-1)」等の[奥ゆかしさ]、「路地のしっとりとした静けさに京都を感じる(80-1)」等の[しっとりとした情緒性]、「幻想的な趣(96-3)」等の[幻想性]、「奥嵯峨の風情は質実剛健・風格がある(101-1)」等の[風格]、「風雅な茅葺きの山門(53-3)」の[風雅]、「ひっそりとしている(93-2)」等の[静けさ]、「どっしりとしていて落ち着く(21-2)」等の[落ち着き]の7グループ(第1G)から成る。一方、[意味の読みとり]は[歴史と文化][調和と対比][京都の固有性](第2G)、更に「現代版交通の要所(41-1)」の表現に見られる[隠喩的意味](第1G)の4グループから構成される。[歴史と文化]は昔を忍ばせる面影・雰囲気と伝統的な文化を、[調和と対比]は周辺環境との調和に加え新しいものと古いものの調和・対比をそれぞれ景観対象の中に読み取っている。[京都の固有性]には「京都人の季節に対する細かい心づかい(53-1)」の様に「京都人の特性」を読み取る場合と、「京都に帰ってきたと思う(21-3)」の[京都のシンボル]としての位置づけを読み取る場合がある。

(6) 考察

【時間的・質的視対象】の内訳に注目すると、[季節的要因][時間的要因]に見られる「変化の要素」,[素材][色彩][光と影][形]等に見られる「部分への注目」が特徴的である。特に[季節的要因]では、夏を除く3季節の表象要素としてユリカモメ・雪・桜・紅葉等が限定されており、これらを評価した景観整備が必要と言える。また[四季折々の変化]の様な日常的・恒常的観察に基づく変化そのものが、観察者の心象に影響を与えている点も注目される。

【空間的視対象】9項目内では塔・茶店を除く単体建造物の記述は見られず、サンプル写真中に見られる建築物・建築的エレメントは、観察の対象物と言うよりも寧ろ観察者の【知識】や【経験】を啓発する要素として作用している、若しくは社寺等の領域性をもった場所の空間シンボルとして作用していると考えられる。

景観構造全体について、既往の景観空間と評価空間の大別による景観の評価構造の整理結果(図3)*注5)を基に比較考察すると、景観空間が本稿の【空間的視対象】

【時間的・質的視対象】、評価空間が【知識】【経験】【心象】に対応していると言える。景観空間の対象(Object)には、山・川・街・建物・人等の人間が視知覚現象として

図3 景観構造の心理的評価構造(参考文献11より引用作成)

表1 意識要素の記述項目と特性項目数量

特性項目	第1固有値	第2固有値	第3固有値
石畳道・階段	2.4158	-0.6415	0.4228
里	0.1506	1.2352	3.4466
塔	0.2337	-0.9548	-0.9921
塀・石垣	0.8288	1.3029	1.9314
伝統的街並	2.5488	-0.2917	0.3914
交通	-0.1144	1.5394	1.1779
人	-0.4894	-0.0246	0.7168
山	0.6341	1.6062	-0.3574
河川・池	0.3096	1.3790	0.9889
特定の建物・場所	0.3313	-0.5809	-0.6024
光と影	0.8057	-0.3454	1.8143
眺望・屋並み	-0.0348	0.8310	2.4939
桜	0.6125	1.0233	0.2855
紅葉	1.3502	1.6842	1.6862
雪	-0.0775	1.0265	2.5397
ユリカモメ	0.8715	2.5333	0.4846
夜景	1.3614	3.2631	1.7180
夕方・夜明け	0.8068	0.1336	0.8432
朱塗り	0.5404	2.8545	1.7609
花の色	1.3928	-0.4083	1.5607
青い空	0.8040	0.5541	0.0840
レンジ	3.9426	5.7965	5.3781
相関係数	0.8135	0.7685	0.7257

捉える「物的対象物」に加えて、季節・時間帯等の、一時的ではあるが物的対象物に彩りを添える「変化要素」、更には眺望等の「視点場特性」と、形・素材・色彩等の「対象物の属性」が対応していることが確認できる。また評価空間との対応では、歴史的知識・有名度等の観察者が日頃見聞きし習得した情報或は過去の経験が、評価因子の一部を構成していると考えられる。景観読解・心象形成のプロセスについては、【空間的視対象】【時間的・質的視対象】を視覚情報として取り入れ、【知識】若しくは【経験】のフィルターを通して意味の読みとりを産み、引き続き【心象】の形成・評価につながってゆく過程が予測可能である。

4. 意識された景観要素による類型化

対象写真サンプルについては①観察者の意識要素②視対象(写真)の構図的特性・構成要素の2つの視点から類型化を試みる。先ず本章では、如上の【空間的視対象】【時間的・質的視対象】の第1・2G項目を、積極的・意識的に視知覚された景観対象として評価し、観察者の「意識要

素」と定義する。以下、意識要素の該当により写真サンプルを記述し、数量化Ⅲ類とクラスター分析で分類を試みる。

(1) 定性データによる記述

応募写真113点を21特性項目の定性データに置換・記述した内訳を表1に示す*注6)。この際、前章の内容を参考に[素材]は「塀・石垣」、[街並・地区]は「伝統的街並み」、[眺望]は「眺望・屋並み」と改称し、また[午後・夕方]と[夜明け]は一つの特性項目に纏めて記述した。

(2) 景観タイプの類型化

有効111サンプルについて数量化Ⅲ類を適応し、第3固有値までの固有ベクトルを求めた。第1軸(表1)については、[紅葉・夜景・花の色/石畳道・伝統的街並み](正/負)の対比から、正を朱紅色等の「明景色」、負を灰色に代表される「暗景色」とし、【明暗に関する軸素】と仮定した。第2軸は正を[水・山・ユリカモメ]に代表される青・白色系の「冷覚景」、負を[夜景]に浮かぶ[朱塗り・紅葉]に代表される紅・黒色系の「温覚景」とし、【冷温感覚に関する軸素】と仮定した。第3軸は同様に【都心・郊外に関する軸素】と仮定する。

次に3軸迄の各固有値(サンプル数量)を用いて、ユークリッド平方距離・ワード法によるクラスター分析を行い、比類似度20で7つのクラスターを得た(図4)。

相対度数分布(表2)をもとに30%を越える特性項目を記述要素として評価し、各グループ(以下「景観タイプ」と称す)を「河川景」「建物景」「光影紅葉景」「山景」「里景」「朱塗り景」「伝統的街並み景」で呼称する。以下各景観タイプの概要と代表写真例を示した。

- ①「河川景」：河川・池を主視対象とし、山(41%)桜(31%)を添景として取り入れる景(写真1)。
- ②「建物景」：特定の場所*注7)の固有性を評価し、特に塔(40%)を視対象とする景(写真2)。
- ③「光影紅葉景」：光と影と紅葉の織りなす様を評価する景。塀・石垣を添景とする場合(33%)があるが、それ以外の構成要素が加わることは殆ど無い(写真3)。
- ④「山景」：山・山並みを単一視対象で愛でる景。組み合わせは複数あるが、30%を越える記述項目は無い(写真4)。
- ⑤「里景」：郊外部に視点を持つ。眺望の良い場所からの雪を伴う屋並み景(56%)が代表景となる(写真5)。
- ⑥「朱塗り景」：社寺の朱塗りを主視対象とし、ライトアップさ

写真1

写真2

写真3

写真4

図4 デンドログラム

表2 景観タイプ別相対度数分布

景観タイプ	石畳道・階段	里	塔	塀・石垣	伝統的街並み	交通	人	山	河川・池	特定の場所・建物	光と影	桜	紅葉	雪	ユリカモメ	夜景	朱塗り	花の色	青い空
河川景	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
建物景	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
光影紅葉景	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
山景	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
里景	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
朱塗り景	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
伝統的街並み景	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10

れた夜景を見る景(56%)。特定の場所の指摘が43%を占める(写真6)。

写真5

写真6

写真7

⑦「伝統的街並み景」: 伝統的街並みと石畳の道・階段(76%)の組み合わせ景(写真7)。

「桜」は「河川景」に、「雪」と「屋並み」は「里景」に特徴的な要素となる。また「夜景」該当サンプルは全て「朱塗り景」に分類された。一方、交通・人・町並み・夕方・夜明け・花の色・青い空は全体的に分散し特定景観タイプの特徴要素にならない。

(3) 考察

景観タイプ別の1・2軸上サンプルプロット(図5)は、全体的に2軸周辺に分布している。「伝統的街並み景」が暗色景に大きく偏る一方、「河川景」「山景」「里景」の自然要素の強いものは冷覚に、「朱塗り景」の社寺空間に多く見られる景は温覚に集まっていることが分かる。人工-自然の対比で概観すると、「伝統的街並み景」「建物景」「朱塗り景」の人工建造物を視対象とする景が暗色もしくは温覚傾向を持ち、「河川景」「山景」「里景」の自然要素の高い景・郊外景が冷覚傾向をもっていると言える。前者は京都の場合、古い街並み・社寺空間を景観対象とする割合が高く、くすんだ色彩(特に石の灰色、塀・壁の茶褐色)がイメージの暗さを生む一方、鳥居の朱色等が温かみのある景観認識を導いていると考えられる。後者は水・空の青色と雪・桜の白色を基調に、冷たい美しさが好まれる景観であると考えられる。

5. 構図的な景観要素による類型化

前章では撮影者が特に意識・注目した景観要素で分類を試みた。本章では対象写真を構図的に把握する視点から、近景～遠景構成要素及び幾つかの景観特性に注目し、前章同様の手法を用いて有効111写真サンプル进行分类する。

(1) 定性データによる記述

構図分析については①近～遠景構成要素②視点場の環境③仰俯瞰④奥行きを表す形式の4点に注目し、表3に

図5 景観タイプ別サンプルプロット

表3 構図要素の記述項目と特性項目数量(レンジ)

特性項目	第1固有値	第2固有値	第3固有値
近景構成要素			
建物	0.7809	3.1642	-2.0735
水	-1.0774	-1.9683	1.8898
道路	0.9261	1.1039	2.3499
境内・庭園・広場	0.2156	0.2412	2.5255
草花	0.9057	1.0867	-0.2630
樹林・並木	2.1417	1.0991	-0.3983
人間	0.5930	-0.4988	5.4982
船舶・車輛	-1.2428	2.5468	0.1409
鳥	0.5266	-1.5542	4.4272
その他・なし	3.5722	-1.9713	-2.0333
	(5.4983)	(5.7111)	(7.8481)
中景構成要素			
市街地	-0.1685	-2.4701	3.0452
建物	0.1452	1.7959	-0.6294
建物+緑	-0.7741	0.2798	2.3750
水	1.0938	-1.5222	3.1401
山・山並み	4.9372	-1.4240	-2.3971
樹林・並木	-0.3858	-0.5861	1.7570
船舶・車輛	-4.0839	-4.8406	2.8674
その他・なし	-1.9432	1.6490	-0.1606
	(9.0210)	(6.6365)	(6.1852)
遠景構成要素			
市街地	2.1639	-1.3170	-1.9967
建物	0.3277	1.0078	1.1578
建物+緑	-1.5040	-0.1498	2.4138
山・山並み	0.1223	-2.5495	0.3492
樹林・並木	-0.5007	1.8513	0.0779
雲・虹	4.0955	-1.0229	2.0747
その他・なし	0.6105	1.4011	-0.3190
	(6.2593)	(4.4008)	(4.4884)
視点場環境			
トラス・スペース	0.8436	-0.7505	2.7036
高所	3.0985	3.2195	3.6980
囲い	1.3038	1.7687	1.3321
道路上	-1.6532	1.2503	-1.8339
橋上	-2.3157	-3.5632	1.7980
	(5.4142)	(5.3319)	(6.6016)
仰俯瞰			
仰瞰景	1.4183	1.7482	-0.3340
平遠景	-0.8794	0.0130	0.6377
俯瞰景	0.6010	-2.8754	-1.5666
	(2.2977)	(4.6236)	(2.2043)
奥行き			
近接部位景	0.4772	0.9663	2.0860
パース景	-1.5863	-0.1327	-0.8773
重相景	1.5616	0.0454	0.7584
	(3.1479)	(1.0990)	(2.9633)

相関係数 0.6753 0.6424 0.6159

示す特性項目(7項目)でサンプル記述を行う。『近～遠景構成要素』は美学的構図による分類であり、本報では萩島ら*6)による風景画構図のメッシュ分析による結果を用いた*注8)。『仰俯瞰タイプ』は消点の位置により判定する。『奥行きタイプ』は①格子窓・橋梁部位・組物等の視対象を3～5m範囲内に捉えるものを「近接部位景」②道路・河川等の透視図法的効果により消点が明快なものを「パース景」③その他の消点が明確でなく、構成要素の重なりによって奥行きを示すものを「重相景」*注9)とした。

(2) 構図タイプの類型化

数量化Ⅲ類の固有値数・クラスター分析手法は前章に準ずる。第1軸(表3)は近～遠景構成要素に関して①近景が「樹林・並木/道路」(正/負)②中景が「山並み/乗物」③遠景が「雲虹/市街地」の各対比から正を「自然景」、負を「人工景」とし【自然-人工景に関する】と仮定した。第2軸は視点場環境属性の「囲い/高所・橋上」の対比から正を「閉鎖景」、負を「開放景」とし【閉鎖性の軸素】と仮定した。第3軸も同様に【近接-隔離景に関する軸素】とする。

クラスター分析では比類似度40で5つのクラスター(以下「構図タイプ」と称す)を得(図6)、各々を「広庭重相型」「橋上パース型」「高所重相型」「道路パース型」「囲い重相型」で呼称する。相対度数分布(表4)による整理概要を以下に示した。

- ①「広庭重相型」：オープンスペースを視点に持ち、近景が水、中景が樹林・並木、遠景が山・山並みの平遠景
- ②「橋上パース型」：橋上に視点をもち、近景が水、中景が船舶、遠景が市街地或いは山並みの平遠景
- ③「高所重相型」：近景が樹林・並木、中景が市街地或いは

図6 デンドログラム

山並み、遠景が山並みの俯瞰景

④「道路パース型」：近景が道路、中景が建物、遠景が樹林・並木の平遠景

⑤「囲い重相型」：近景が樹林・並木、中景が建物、遠景なしの仰視景

(3) 考察

型別の1・2軸上サンプルプロット(図7)では、パース型が人工景に、重相型が自然景に偏る。5グループは何れも視点場環境属性・奥行きタイプにより分類が行われたと言え、視点場環境属性がオープンスペース・高所・囲いのタイプはいずれも重相型となり、道路・橋上からはパース景となる。各構図タイプに共通する構成要素では近景

表4 構図タイプ別相対度数分布

図7 構図タイプ別サンプルプロット

表5 好きな景観型

景観タイプ	河川景(26サンプル・33票)*1			建物景(15サンプル・25票)			光影紅葉景(11サンプル・46票)		*1 (総サンプル数・平均得票数)
構図タイプ	広庭重相型	橋上パース型	道路パース型	広庭重相型	道路パース型	囲い重相型	広庭重相型	囲い重相型	
視点場	河川敷	橋上	川沿いの道路上	社寺境内	道路上	社寺境内	社寺境内	社寺境内	*2 強調文字は各景の主視対象を示した
構成と特徴	河川敷の「パース」から水面を主視対象に見る景。背景は、中景が樹林、遠景に山を垣間見る。	橋の上から、河川の流れる方向に市街地または山を透視図法的に見る景。	道路上視点から、脇を流れる河川・小川・水路等を並木と共に眺める景。	広がりのある境内の任意視点から、樹林を通して、奥に塔等の建物を見る景。	パースの効いた道路上から、中距離景域に建物を主視対象とする景。背景(遠距離景域)は樹林となる。	境内の樹木近くの視点から、枝葉越しに建物を仰ぎ見る景。	広がりのある境内の視点から、紅葉と更に奥の建物を見る景。	紅葉に間近な視点から、枝葉越しに建物を仰ぎ見る景。視点は視対象に近接する。	
①近景要素 ②中景要素 ③遠景要素	①水*2 ②水/樹林・並木 ③山	①水 ②市街地/船舶 ③市街地/山	①水/道路 ②水 ③樹木・並木	①境内・庭園 ②樹林・並木 ③建物	①道路 ②建物 ③建物+緑	①樹林・並木 ②建物 ③なし	①境内・庭園 ②樹林・並木 ③建物	①樹林・並木 ②建物 ③なし	
構図例									
仰俯瞰タイプ	平遠景	平遠景・俯瞰景	平遠景	平遠景	平遠景	仰視景	平遠景	仰視景	
サンプル数	13 (No. 2)	7 (No. 4)	4	3	7 (No. 4)	5	6	3	
平均得票数	2.9	3.2	4.5	2.1	2.6	2.7	6.8 (No. 1)	2.7	

景観タイプ	山景(14サンプル・37票)			里景(10サンプル・41票)			朱塗り景(14サンプル・25票)		伝統的街並み景*3
構図タイプ	広庭重相型	高所重相型	囲い重相型	広庭重相型	高所重相型	道路パース型	道路パース型	囲い重相型	道路パース型
視点場	河川敷	高所	山裾部	河川敷	高所	道路上	道路上	社寺境内	道路上
構成と特徴	水辺の「パース」から、建物・橋梁越しに山を捉える景。	見晴らしの良い場所から、樹林越しに市街地、更に遠景に山並を捉える景。	山裾の草花に近接した視点から、中距離景域に山を仰ぎ見る景。	水辺の「パース」から、緑の中の民家を見る。背景に山並を捉える景。	高所から屋並み(屋根)の拡がりを見る景。	道路上視点から見下ろす建物の屋並みが透視図法的な効果をもつ景。	パースの効いた道路上から中距離景域に朱塗りの建物を見る景。	境内の任意視点から、樹林の奥に朱塗りの建物を見る景。	石段の道路上から、京町家の家並を透視図法的に見る景。
①近景要素 ②中景要素 ③遠景要素	①水 ②建物(+緑) ③山	①樹林・並木 ②市街地 ③山	①草花 ②山 ③なし	①水 ②建物+緑 ③山	①樹林・並木 ②市街地 ③山	①道路/樹林 ②建物 ③樹林・並木	①道路 ②建物/なし ③なし/建物	①樹林・並木 ②建物 ③なし	①道路 ②市街地建物 ③市街地/なし
構図例									
仰俯瞰タイプ	平遠景	——	仰視景	平遠景	俯瞰景	俯瞰景	仰視景	仰視景・平遠景	平遠景
サンプル数	5	6	1	1	3	5	5	8 (No. 3)	20 (No. 1)
平均得票数	5.4 (No. 3)	2.2	4.6 (No. 5)	5.0 (No. 4)	3.3	5.8 (No. 2)	2.5	2.3	2.0

：水・樹林・並木、中景：建物、遠景：山・山並みが特徴的であり、水は①広庭重相型と②橋上パース型、樹林・並木は③高所重相型と⑤囲い重相型、建物は④道路パース型と⑤、山は①②③に対応している。

6. 好きな景観型

意識要素と構図的特性・構成要素に注目した如上の類型結果を踏まえて、クロス集計を基に①近景～遠景構成要素②視点場③仰俯瞰④サンプル数と平均得票数に注目し、有効111サンプルを整理した分類表を表5に示した*注10)。各景観タイプを更に構図タイプ分類した結果、最終的に①河川景：3 ②建物景：3 ③光影紅葉景：2 ④山景：3 ⑤里景：3 ⑥朱塗り景：2 ⑦伝統的街並み景：1の17組(以下「景観型」と称す)に分けられた。近～遠景構成要素では「水」「山」「樹林・並木」「建物・市街地」「境内・庭園」が各タイプに共通し頻度の高い要素となる。また広庭重相型の視点場には河川敷と社寺境内のオープンスペースの2通り

がある。展覧会入場者投票に基づく評価要因については*注11)、平均得票は景観タイプ別では「光影紅葉景」「山景」「里景」が、構図タイプ別では「広庭重相型」が高い。一方サンプル数については景観タイプで「河川景」、構図タイプで「道路パース型」が多かった。サンプル数最多の組み合わせは「伝統的街並み景・道路パース型」、得票数最多では「光影紅葉景・広庭重相型」の組み合わせである。

7. おわりに 知見と考察

本報では注目要素と構図要素による類型化を通して「好きな景観」の分析を試みた。今回の研究報告の成果として以下の点が挙げられる。

1) 景観観察者の意識分析の結果、①空間的視対象②時間的・質的視対象③知識④経験⑤心象の5つにより景観読解・心象形成構造が整理された。景観空間の視対象は空間的視対象に対応する「物的対象物」と、時間的・質的視対象に対応する「変化要素」「視点場特性」「対象の属性」により成

り立つことが確認される。

2) 観察者が意識した景観要素による類型化の結果、①河川景②建物景③光影紅葉景④山景⑤里景⑥朱塗り景⑦伝統的街並み景の7景観タイプが挙げられた。人工建造物に注目する景は暗色・温覚景、自然要素(水・樹林・山)に注目する景は冷覚景に集まる傾向が見られる。桜は河川景、雪・屋並みは里景、夜景は朱塗り景の特徴的な要素である。

3) 構図分析では、視点場環境属性・奥行きを示す形式により5構図タイプが分類された。近～遠景構成要素から①広庭重相型及び②橋上パース型は「水に関わる景」、③高所重相型は「山並みを見る景」、④道路パース型及び⑤囲い重相型は「建物に関わる景」と位置付けられる。

4) 視点場により奥行きを示す景観属性は分化する。道路・橋上の視点からはパース景となり、オープンスペース(河川敷等)・高所・囲い(社寺境内等)の3視点からは、構成要素の重なりによる重相景となる。

5) 景観タイプ・構図タイプの組合せにより総計111サンプルが17組の景観型に整理された。「伝統的街並み景・道路パース型」が最もサンプル数の多い景観型であり(18%)、「光影紅葉景・広庭重相型」が最も評価が高い。

解説文に基づく意識分析では、経験或は知識といった要因が観察者の評価構造の中で意味を持つという結果であった。与えられた知識を通じた経験的成長がもたらす風景観定型化の指摘^{*)3)}は、本研究に於ける景観構造でも同様に見られた。景観評価が観察者の心象となって表現されるとすれば、日常的接触・過去の体験・有名度・歴史的知識等を、景観形成に計画的に取り入れる指標が今後必要となる。また注目要素で「河川景」に分類された写真の中には、河川は直接撮影されないが隣接する川の存在を意識して河川敷の景観であることを強調解説したものが数例見られた。景観研究の場合、視覚情報を分析対象とすると、粹取られた止景観の一部に分析が偏向しがちであるが、目で捉える対象と心で意識された対象が分離される傾向は、五感の働きを導入した分析の必要性を示唆している。

クラスタリングで得られた景観タイプは京のイメージを喚起する景観構成要素であり、都市固有性を反映したものである。公的評価である一般市民の投票結果については、要因分析の説明変数を更に検討することで、より有効な評価基準が得られると考える。本報では、京都の優れた写真を題材に、歴史都市に於ける景観類型を試みた。引き続き、秩序と複雑さによる美的尺度を考慮した①各構成要素の面積比率②構成要素数等の景観特性、更に前述した③*レイ*等に取り上げられる頻度や場所に纏はる史実、日常性の尺度等を記述項目に取入れ要因分析を試みる予定である。

謝辞

本研究をまとめるにあたり、資料提供にご協力頂いた京都市都市計画局・佐竹和男参事、京都府建築士会関係各位に謝意を表します。

注釈

- 1) 写真募集並びに写真展は京都市・京都府建築士会・平安建都1200年記念協会の主催で実施され、京都文化博物館で1994年2月に一般公開展示された。テーマは「京都市内で新旧を問わず京都の歴史と伝統文化が色濃く感じとれる自然風景・町並み・街角等『貴方が好きな京都の景観』を写真にしてお寄せください。」である。
- 2) 1985～89年の京都市観光調査年報の平均値の上位は①清水寺周辺②平安神宮・岡崎公園③嵐山④金閣寺⑤大原の順である。
- 3) 「思わずシャッターを切りました」「多くのカメラマンで賑わいます」等の写真撮影に関する記述をはじめ、特に景観意識と関連が薄いものは記述サンプルから除外した。
- 4) (写真 $\times$ 77'、番号-記述 $\times$ 77'、番号)を記載した。
- 5) 『景観とはあくまで人間の視知覚的な現象として捉えられところの自然的あるいは人文的な地物、およびそれを取りまく空間の特性であり、景観の質とは人間を主体として景観内に定められる関係の特質であって、その評価とは、人の心・能力・行動あるいは知覚などを媒体として景観の質を議論することと考える。』と定義される^{*)13)}。
- 6) 該当の是非については、意識分析に於ける該当に京都大学大学院生5名による写真上の該当判定結果(3名以上)を加えた。特性項目は意識分析の結果を踏まえ、【空間的視対象】【時間的・質的視対象】で挙げられた第1・2Gの中から、写真を通した視覚判別の可能な項目に限って選択した。例えば[四季折々の変化][鴨川の水のぬかるみ]等の時間的広がりを持つもの、視覚以外の感知覚に関するものは除外している。
- 7) 16サンプルの視点場は御所・東寺・伏見桃山・岡崎公園・南禅寺・永観堂・松が崎・竹田が挙げられた。
- 8) 近景は下方/左右に配され、中景は中間の水平ラインよりやや下方に平行に配される。最下方または上方に配されることはない。遠景は更に限定され中間の水平ラインよりやや上方、且つ図面のはば中央部分に配される。
- 9) 奥行きを示す効果には①連続表面の透視図の効果・*テカフト*-密度・*スケール*操作②空気遠近法③視対象の重なりがあるとされる^{*)14)}が、パース景は①に、重相景は③に該当する。立面或いは領域の重ね合わせによる相の空間認識法^{*)15)}、借景の面的空間性と景の並置による遠近法の指摘^{*)16)}の他、類似概念を用いた関連研究に視点場からの距離帯から空間単位を分節する「相」概念を導き、景観空間の多相的構造に着目した仲間の研究^{*)17)}等がある。
- 10) 整理手順は如上の相対度数分布を用いた同様の手法を用いた。景観タイプと構図タイプのクロス集計から、サンプル数2以下のものは除外した。但し平均得票数上位5位以内のものは残している。
- 11) サンプル毎の得票数を目的変数、4・5章の特性項目を説明変

数とする数値化Ⅰ類(要因分析)の結果(重相関係数0.71)を参考にすると、意識要素では①花の色②青い空③雪④夕方・夜明け、構図的要素では①近景の道路②中景の建物が高いウェイトを占めた。但し重相関係数(<0.85)より有意な分析とは言えない。従って本項では単純集計による報告に止める。

参考文献

- 1) 樋口忠彦、日本の景観、春秋社、1981
- 2) 中村良夫、風景学入門、中央公論社、1982
- 3) 奥野健男、文学における原風景、集英社、1989
- 4) 内田芳明、風景とは何か、朝日新聞社、1992
- 5) 仲上健一他、環境創造と都市戦略、1994、法律文化社
- 6) 荻島哲他、19世紀ヨーロッパ風景画にみる都市景観に関する研究、日本建築学会計画系論文報告集, No. 413, pp. 83~93、1990
- 7) 坂井猛他、広重の浮世絵風景画にみる景観分類に関する研究、日本建築学会計画系論文報告集, No. 461, pp. 165~174、1994
- 8) 須藤拓他、近世以前の水墨画にみる水辺の景観構成について、第25回日本都市計画学会学術研究論文集, pp. 667~672、1990
- 9) 川崎雅史他、景観に現れる陰影の心理的評価に関する研究、第25回日本都市計画学会学術研究論文集, pp. 691~696、1990
- 10) 小柳武和他、語彙および浮世絵にみる「夜景」の認知特性に関する研究、第25回日本都市計画学会学術研究論文集, pp. 649~654、1990
- 11) 羽生冬佳他、夜景の構図とイメージに関する基礎的研究、第25回日本都市計画学会学術研究論文集, pp. 661~666、1990
- 12) 川喜田二郎、発想法、中公新書、1967
- 13) 中村良夫他、土木工学大系13景観論、彰国社、1977
- 14) 樋口忠彦、景観の構造、技報堂、1975
- 15) 原広司、住居に都市を埋蔵する、住まいの図書館出版局、1990
- 16) キュタソ・ベルグ、篠田勝英訳、日本の風景・西洋の景観、講談社、1990
- 17) 仲間浩一、眺望景観の分析に基づく空間のつながりに関する考察-図絵資料の分析を通じて-、第28回日本都市計画学会学術研究論文集, pp. 511~516、1993

(1994年8月5日原稿受理、1995年3月8日採用決定)